

Title	フレーザー 金枝篇(永橋卓介譯, 生活社刊)
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1943
Jtitle	史学 Vol.22, No.1 (1943. 9) ,p.67- 68
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19430900-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

良心と探究心の強さに打たれずにはをられない。

博士が極めて多岐に渉る史料の蒐集とその綿密縷々たる考證とに長じてゐたことは定評である。否、稍もすれば、それは寧ろ度を過すとさへ思はれる程のものであつた。かりに博士の論著に難を稱へるものありとせば、それは屢こうした博士の飽くなき史料探究の過度の丹念さについてであつた。時には本文を凌ぐくらゐに多くの註を付けたりするその書振りの煩雜極まること、人をして暗に博士の居所たりし長崎で拵へるお雑煮みたいだといはしめたこともある。博士の著作にみる記述の煩瑣は確かに讀者をして往々困却せしめたであらうし、論旨もそれがために自ら稀薄となる傾きを免れなかつたやうである。研究も深まる代りに前進が鈍るといつた嫌疑が多分にあつた。その著が概して一編を貫く主張や明確なる結論を訴へることに乏しいと思はれるのも、かかる事情の故にあつたかも知れない。しかもそれがまた博士の眞骨頂でもあつたのである。

一の主張を披瀝し、一の結論を導き出すには、ゆるぎなきその據りどころがなければならぬ。歴史を書くためのさうした據りどころは嚴密なる史實の穿鑿であり、史料の究明であらう。博士が常に先づ努めたのがこれであつた。本書中の第三編「日英交通史料」は正にその最も傾倒せられたところなのである。史書は時代の推移に伴つて書き改められることがある。史實そのものが變化を來すわけでは勿論ない。書かれた歴史の觀點に相違を生ずるのである。史料の探究に専念する最も基礎的な科學的純歴史研究

の立場は實にここに重大な意義を持つ。かくして鮮明せられた史實は書き直される必要がないからである。それは常に後學の發足の足場となることが出来るのである。「日英交通史料」は本書中の壓巻と思はれるが、その眞價も即ちここに存するといはなければなるまい。

或は博士の行手には、尙ほこの自ら礎いた足場に立つて博士獨自の史觀による日英交通史を執筆すべき任務が残されてゐたといふべきかも知れないが、惜むらくは、天博士にその壽をかさず、博士また人壽の限りあるに超然として些か枝葉に關はり過ぎた恨みなしとしない。しかし、これを以て直に博士の業績を左右せんとするのは勿論早計であらう。

學者の道、學問のしかたは必ずしも單一ではない。學者が自らの主觀的興味に耽溺して全く實社會から隔離するのをよいことだとは決していいはれない。ただ一切を研究に没入しつゝ顧みないだけの情熱はなければなるまい。その意味で武藤博士の探究心は尊ばれねばならぬと思ふのである。(昭和十七年八月 會田倉吉)

フリー 金枝篇 (永橋卓介譯 生活社刊)

今日民族學を口にするものにして、フリーザーの名を知らぬものはないであらうし、フリーザーの名を口にするものにして、その名著金枝篇をしらぬものも、おそらくないであらう。それほど金枝篇は、斯學の古典とされてゐる。しかしその決定版は本文十卷であり、それに索引及び文獻目錄一卷、補遺一卷が加はつて、

都合十三卷といふ尢大なものであるから、これを讀破することは容易なことではない。しかるに著者自身によつて別に抄本一卷が公にされたのであつて、永橋氏の翻譯はこの抄本によられたのであるが、それにしても譯稿にして三千枚にのぼり、従つて上中下の三冊に分たざるをえなかつたといはれ、この上巻にしても本文五〇四頁の大著であつて、決定版の有する豊富な脚註が失はれ、例證が減じてゐるといふのみで、その理論的部分はことごとく保有されてゐるのであるから、彼の學說をうかがふべき最良の書といつてよい。もちろん彼の研究法や學說については、今日種々の批評がなされるにしても、民族學を口にするかぎり、本書の一讀を怠つてはならない。

評者はかつて本書をよんで、その冒頭のネミ湖畔のくしき物語にいたく興を覺えてゐたところ、昭和四年の春はからずもこの地に遊ぶことをえたが、樹木の繁茂せるは湖畔の一小部分であつて、心ひそかに想像した幽邃は全くみられず、景觀はむしろ索寞たるもので、いささか興醒めを感じたが、それほど本書の敘述は人を魅するに足る名文と言へよう。永橋氏はすでに同じ著者のサイキス・タスクの譯者として知られ(岩波文庫)、斯界の一權威であるから、本書の譯者としてまことにその人を得たといふべく、これを江湖に推薦するとともに、中巻、下巻のすみやかに完成されんことを祈つてやまない。(松本芳夫)

ペッティー著政治算術(大内兵衛譯) (栗田書店發行)

高野岩三郎博士の監修になる統計學古典選集十二卷十四篇の含むところの大部分は十九世紀の著作に屬するけれども、その中十七世紀の著作が二篇だけ收載せられてゐて、近世思想史研究者の關心をひいてゐる。即ち、グラントの「死亡表に關する自然的政治的考察」(一六六二年)と、此處に紹介せんとするサー・ウィリアム・ペッティーの「政治算術」とである。

サー・ウィリアム・ペッティーは一六二三年(元和九年)にハムプシャー州ロムジイーに生れ、青春にして名譽革命の疲風怒濤を體驗し、醫學者、大學教授、アイルランド行政官、地主として破瀾にとんだ生涯を送り、一六八七年(貞享四年)にこの世を去つた。この短くない生涯を通じて彼はかはることなく學問を愛し、經濟學、統計學、醫學、物理學、機械等について數多くの著書を残した。就中彼の經濟論は學史家によつて極めて高く評價され、價值論及び價幣論におけるすぐれた洞察の故に「近世經濟學の建設者」を以て目されてゐるのであるが、のみならず統計學史上に於てもなみ／＼ならぬ足跡を残してゐるのであつて、この「政治算術」及び「アイルランドの政治的解剖」の不朽の二著を残してゐる。彼以前の國家社會に關する認識がいづれも抽象的又は形而上學的辯證にもとづいて組み立てられ、その結果どうしても國家社會の現實から游離した一種のドグマになり勝であつたのに對して、ペッティーは一の全く新しい方法を創始した。即ち彼